

2019.09.29 第5主日礼拝

ネヘミヤ 2:1-8, 17-18 「ネヘミヤの祈りの姿勢」

## 聖書

- 1 アルタクセルクセス王の第二十年のニサンの月に、王の前にぶどう酒が出されたとき、私はぶどう酒を取り、王に差し上げた。それまで、私は王の前で気持ちが沈んでいたことはなかった。
- 2 すると、王は私に言った。「病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように沈んだ顔をしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない。」私は非常に恐れて、
- 3 王に言った。「王よ、永遠に生きられますように。私の先祖の墓がある都が廃墟となり、その門が火で焼き尽くされているというのに、どうして沈んだ顔をしないでいられるでしょうか。」
- 4 王は私に言った。「では、何を望んでいるのか。」私は天の神に祈ってから、
- 5 王に答えた。「もしも王が良しとされ、このしもべにご好意をいただけますなら、私をユダの地、私の先祖の墓のある都へ遣わして、それを再建させてください。」
- 6 王は私に言った。王妃もそばに座っていた。「旅はどのくらいかかるのか。いつ戻って来るのか。」王はこれを良しとして、私を遣わしてくださることになり、私は予定を伝えた。
- 7 また私は王にこう言った。「もしも王様がよろしければ、ユダに着くまで私が通行できるように、ユーフラテス川西方の総督たちへの手紙をいただけるでしょうか。」
- 8 そして、宮の城門の梁を置くため、また、あの都の城壁と私が入る家のために木材をもらえるように、王家の園の管理人アサフへの手紙もお願いします。」わが神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくださった。

17 私は彼らに言った。「私たちが直面している困難は見てのとおりだ。エルサレムは廃墟となり、その門は火で焼き払われたままだ。さあ、エルサレムの城壁を築き直し、もうこれ以上、屈辱を受けないようにしましょう。」  
18 そして、私に恵みを下さった私の神の御手のことと、また王が言ったことばを彼らに告げた。すると彼らは「さあ、再建に取りかかろう」と言って、この良い仕事に着手した。

## はじめに

先週はネヘミヤ1章から、問題が起こった時に真っ先にすることは何かを学びました。ペルシア王の献酌官であったネヘミヤは、故郷エルサレムの城壁が崩されたままになっていることを知らされたとき、「嘆き悲しみ、断食して天の神の前に祈った。」(ネヘミヤ1:4) のでした。ネヘミヤはよく祈る人でした。長い祈りをささげるときもあれば、短い祈りをささげることもあります。問題の種類や緊急性などによって祈り方は変わりますが、まず祈りから始めることを習慣化できたら幸いです。どんなときにも祈りの門は常に開かれているのですから。

## 1. 祈りを聞かれる方

詩篇 65:2 に「祈りを聞かれる方よ。みもとにすべての肉なる者が参ります。」というみことばがあります。私たちが神さまに祈りをささげるとき、どのような思いで祈っているでしょうか。祈りは神さまとの会話です。一方的に自分の願いを告げるだけでなく、神さまからの答えを聞くことも祈りの大切な要素です。「祈りを聞かれる方よ」と呼びかけることで、私の祈りを聞いてくださる方として神さまを意識し、神さまと会話する準備ができるのです。ネヘミヤの祈りに「祈りを聞かれる方よ」という直接的なことばは出てきません。しかし、彼は祈りを聞いてくださる神さまの前に心を注ぎ出して祈っています。「どうか、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。」(1:6)、「ああ、主よ。どうかこのしもべの祈りと、喜んであなたの名を恐れるあなたのしもべたちの祈りに耳を傾

けてください。どうか今日、このしもべに幸いを見させ、この人の前で、あわれみを受けさせてくださいますように。」(1:11)。「どうか…」「ああ、主よどうか…」と言って祈る祈りが神さまの前に届かないことがあるでしょうか。子どもが心から願う願いを親として放っておくことはしないように、神さまも「どうか、どうか…」と言って心から祈る祈りに必ず答えてくださいます。「祈りを聞かれる方よ」と言って祈り始めたら、もう神さまを疑ってはいけないのです。神さまはちゃんと祈りを聞いておられます。祈ることばさえ出ないほど辛くても、その思いをすべて知って受け止めてくださっているのです。

## 2. 祈りの答えを待ちつつ

神さまは私たちの祈りと心の内の一切を知っておられます。しかし、すぐに答えてくださるとは限りません。私たちは祈りの答えがすぐに欲しいのです。人は祈りの答えを待つことが苦手です。それゆえに、神さまはすぐに答えないで、ある期間を設けられることがあるように思います。

ネヘミヤは「ああ、主よ。どうか…」(1:11)と心から祈りました。その祈りが聞かれたのは4ヶ月後でした。「アルタクセルクセス王の第二十年のニサンの月」(2:1)に事は動き出します。最初に祈ったのは「キスレウの月」(1:1)でユダヤ暦の9月です。そして祈りの答えとして事が動き出したのは「ニサンの月」でユダヤ暦の1月です。4ヶ月を長いとするか短いとするか捉え方に違いはあるでしょう。4ヶ月どころか何ヶ月、いや何年も祈りの答えがないまま時を待っている方もおられるでしょう。待つ期間については神さまのみが答えを持っておられるのですが、いずれにしても忍耐して待つ中で、神さまは事を動かしてくださいます。ネヘミヤの場合は、王の側からネヘミヤに救いの手が差し伸べられたのです。

献酌官として王にぶどう酒を差し出すときが来ました。ネヘミヤは沈んだ顔をしていたため、王は心配して「病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように沈んだ顔をしているのか。」(2:2)と問います。ネヘミヤが先祖の墓がある都(エルサレムのこと)が廃墟となっていることを告げると、王は「何を

望んでいるのか」と返しました。この時もネヘミヤは「私は天の神に祈ってから」(2:4) 王に答えています。それは、エルサレムに帰還し城壁を再建したいということであり、そのために帰還道中の通告許可と安全の確保、再建工事のために資材調達の便宜などを願い出ました。王はこれらネヘミヤの要求をすべて受け入れ、彼をエルサレムへと送り出したのです。余談ですが、ペルシアの王がネヘミヤをどれだけ信頼していたかが分かるひと言があります。王がネヘミヤを送り出すとき「旅はどのくらいかかるのか。いつ戻ってくるのか。」(2:6) と案じています。いつ戻ってくるのか、ということばの中に、異国の地で信頼を得ていたネヘミヤを知らされます。クリスチャンも世にあってこのようでありたいと願います。

時を要することがあっても祈りは答えられます。ですから、祈りの答えを待ちましょう。一人一人の祈りに神さまが答えて下さる日が来ることを信じています。

### 3. 主の御手が共に

最後に、ネヘミヤの祈りが実現していく背後には、神さまの御手があったことを覚えましょう。王がネヘミヤの願いに答えて諸々の準備をしたのは、王がネヘミヤを信頼していたからですが、それだけではありません。その背後に神さまの御手がともにあったのです。「わが神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくださった。」(2:8) とネヘミヤ自身も証しているとおりにです。再建に取りかかろうとする民をくじくように迫害の手が伸びて来たとき、迫害者にネヘミヤは「天の神ご自身が私たちを成功させてくださる。それで、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。」(2:20) と再建の理由は神ご自身にあると言っています。

神さまの御手は私たちの目には見えません。でも物事が進み行く中に神さまは共にいて良い方向に導いてくださるのです。2:20の「成功させてくださる」ということばは「栄える」ということばと同じ語彙だそうです。「栄える」ということばが使われているのが詩篇 1:3 です。「その人は、流れのほとりに植えられた木。時が来ると実を結び、その葉は枯れず そのなすことはすべ

て栄える。」(詩篇 1:3)。この詩篇のことばを借りるなら、神さまの御手が共にあることは、流れのほとりに植えられた木のようにであり、時が来ると実を結び葉は枯れないということです。流れのほとりに植えられた木とは、神さまといつも共に生きる人の姿であり、神さまから恵みと祝福をいただいて感謝して生きている人のことではないでしょうか。その証がネヘミヤという人物だと思うのです。先ほど、王から「いつ戻ってくるのか」と問われた話をしましたが、ネヘミヤが神さまと王の前に真実に、誠実に生きたことが、祈りの答えに繋がっていると思うのです。

苦しいときの神頼みということばがありますが、普段は祈ることもなく過ごしていても本当に苦しくなると自然に手を合わせて「神さま」と祈ります。そのような祈りも祈りとして尊いと思いますが、その祈りをもう少し掘り下げて、「祈りを聞かれる方に」心に向けて祈ることを初めてみませんか。そして苦しいときだけでなく、どんな時も「神さま」と言って祈る生活を私たちの常とすることが、神さまの御手が私と共にあることを実際的に知る鍵だと思うのです。神さまの御手が共にあるなら、すべてのことは必ず益と変えられると信じています。

## 結び

「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」(ローマ 8:28)。神さまの御手が共にあるとき、このみことばが成就するのです。神さまによって救われ、恵みの中に入れて頂いた者である一人一人は、神さまを愛して今日も生きています。神さまを愛して生きる者に神さまが共にいてくださらないことがあるのでしょうか。いいえ、ありません。神さまはご自分を愛して従う者を必ず顧みてくださり、すべてを働かせて益としてくださるのです。そのような神さまを信じて今週も歩んで行きましょう。